

近代日本語資料としての『日韓通話』

ソン ユンア
成 珣 珂

1. はじめに

先学によって『捷解新語』・『交隣須知』・『隣語大方』などの朝鮮資料が日本語史の資料として利用されてきてはいるが、朝鮮語資料全体からみれば、一部のものにすぎない。特に、明治期における朝鮮語会話書は、当時の話し言葉の研究資料であるのにもかかわらず日本語資料として利用されていないのが現状で、明治期の朝鮮語会話書を日本語史の資料として利用するため、この時期の会話書について書目の整理や諸本の検討などの基本的な作業がもっと進まなければならないと考えられる。そこで、本稿では、その作業の一環として明治期の代表的な朝鮮語会話書である『交隣須知』とともに多く用いられてきた『日韓通話』の書誌的調査および日本語史の資料としてのアプローチを試みた。

2. 書誌の概要

その名が広く知られている『交隣須知』が、江戸時代から明治前期にかけての朝鮮語会話書としてその役割を果たしたのに対して、『日韓通話』は明治中期から明治後期にかけて朝鮮語を学ぼうとする多くの人に利用されてきたものである。

前間恭作と共に『校訂交隣須知』の編著者であり朝鮮総督府通訳官でもあった藤波義貫は、『月刊雑誌朝鮮語』の「私が朝鮮語を学んだ頃—二三十年前を顧みて—」¹⁾という手記で「二三先輩の指金で最初日韓通話一冊を手に入れた」と述べている。

ここでは、『日韓通話』で朝鮮語の学習に取り組んだことを、内容を取り上げながら詳しく説明しており、当時『日韓通話』は朝鮮語を学ぼうとする多くの日本人が手したことを語っている。また、校閲を手がけた柳苾謹も、『日韓通話』が『交隣須知』や『隣語大方』に継ぐべきものであることを述べている。

夫學者所以探其源而語者亦所以傳於人而通其意也如或聞見不博講肄未熟則其於言語文字之間未允金根之繆而反被楚咻之歎牟其關係顧不重歎自丙子開港以後交隣須知隣語大方諸書俱為指南於韓語之學而顧今日韓通話一

帙又出於 貴国人所編其爲書也大而自堪輿歲時小而至日用技藝草木禽獸
事類而易見義釋而易知譬如土壤悉會泰山湏流同歸大海白玉良璧擧萃珍於
藍田瑤草琦花威托根於名園歷觀象胥之書博摘事物提挈綱維未有若是之詳
且盡者也

その『日韓通話』は、初版が 1893 年(明 26) に出版され、1908 年(明 41) まで第 6 版を重ねた。明治 26 年本が国立国会図書館に、明治 28 年本が東京大学東洋文化研究所、明治 37 年本は山口大学経済学部及び東京経済大学櫻井文庫に、明治 41 年本は国立国会図書館に各々所蔵されている。

ここで扱う資料は、国会図書館所蔵の明治 26 年の初版本とする。明治 26 年本の出版地は長崎県の棧原町、出版者は国分建見、出版年は明治 26 年 10 月、大きさは 22×13 センチで全部 186 ページからなっている。この初版には上の「増補」欄はあるが、後ろの「増補」部がない。²

2 版から付け加えられる「増補」部には、「在朝鮮京城 国分象太郎編纂」とあり、「第二十二章 政治・第二十三章 教育(学校)³・第二十四章 船車・日韓訓点千字文」といった近代社会や新しい概念を表す用語・用例および朝鮮における基本漢字千字の両国読みが添えられている。下に、増補部の用例を示してみた。

政府八国ノ政治ヲ司ドルトコロデス (政治・増補・p.2)⁴
師範学校シリシカルニチデ人材ヲ教ヘ教育法ヲ知 然 後学校ノ教師トナシマス
(学校・増補・p.9)
日本東京カラ神戸マデ火輪車ニ乗ルノデスカ (船車・増補 p.14)

『日韓通話』は、対馬の士族出身である国分国夫が釜山で玄采と李重元の協力のもと、出来上がった原稿を京城に送り、兄である国分象太郎が校正を加え、柳苾根・朴齊尙の二人の朝鮮人の校閲を受けたという。その経緯を国分国夫は緒言で次のように述べている。

予カ該書ヲ起稿スルヤ朝鮮京城ノ人玄采及び李重元ノ二氏偶々釜山ニ留
寓スルニ逢ヒ就テ質ス所ロアリ兩氏補助尤モカム稿成ニ及ンテ尚ホ京城
ニ送り之カ校正ヲ加ヘ韓儒柳苾根朴齊尙兩氏ノ檢閲ヲ受ケタルモノ也

著者の国分国夫は対馬の人、対岳と号した実兄国分象太郎とともに朝鮮語学者である。釜山における語学所の教官として釜山に滞留したが、早逝した。本書は著者の歿後遺族によって出版された。⁵ 奥付に編集人として故国分国夫と記しており、本書が国分国夫

の死後、発行されたことが知られる。

また、この奥付には、国分国夫を長崎県対馬の士族として紹介している。当時京城に駐在しながら本書に手を加えた兄の象太郎⁶は、厳原で士族国分建見⁷の長男として生まれた。彼は 1872 年外務省が設置した、府中港に近い光清寺の韓語学所で韓国語を学んだという。1879 年 8 月、釜山領事館の稽古通詞を命ぜられたが、翌年 1880 年には、東京外国語学校の朝鮮語学科に入学、3 年間給費生として勉強をした。1885 年、象太郎は京城領事館御用掛兼裁判所書記心得となり、1888 年に領事館書記生、1892 年に公使館書記生、1895 年に公使館に二等通訳官、1897 年に一等通訳官、1900 年には通訳官から書記官になったようである。

『日韓通話』は、韓国語が中心となりそこに日本語の対訳をつけたもので、日本人のための朝鮮語学習書である同時に、朝鮮人のための日本語学習書としても活用できるものである。

国分国夫は、緒言に、「該書ハ又朝鮮人ノ日本語を學フニ便ナラシメンガ爲メ譯字ノ傍ニ假名ヲ付シ名ケテ日韓通話トハ稱シタリ請フ之ヲ諒セヨ」とあり、『日韓通話』が両方の教材として活用できるという趣旨を述べている。そういう趣旨からか朝鮮人の日本語の学習のため訳字のそばに仮名をつけており、その書名も『日韓通話』と称したようである。題目の由来および本書の編術の目的や趣旨などについては、漢城節署である大石正巳・木下真弘が序に次のように述べている。

凡ソ人海外に出て官商に従事するもの其國語に通曉せず徒に口交際の敦睦を説き商業の發達を求むる、奚ろ得へけんや正巳渡韓以來我邦人の韓語も通するもの甚少きを歎して不止也 然るに此頃國分國夫君韓語學書の編纂成るあり日韓通話と云ふく中略> 明治二六年三月上浣

<前略>保存交易ノ本ハ親密ニ在リ親密ノ本ハ言語ヲ通スルニアリー衣帶水ノ國ニシテ充分ニ親密交易ノ利ヲ得サルハ一ニ言語ノ通セサルニ依ル豈遺憾ナラスヤ國分ニ氏茲ニ觀ル所アリテ此書ヲ著ス兩國將來ニ裨益スル大ヒナリト謂ツヘシ航海商業ニ從事スル者此本ヲ齎サスンバ(ママ)寶ノ山ニ登リテ手ヲ空スルノ譏ヲ免レサラン豈但商業航海ノ徒ニ限ランヤ兩國ノ機關ニアリテ東洋全局ニ心ヲ用ユル者或ハ以テ交涉ノ筈蹄トスルコトアラン書成ル 壬辰十一月

編著者である国分国夫も明治 25 年 11 月に書いた緒言に本の編纂趣旨を次のように記している。

舊來ノ交通一層ノ親密ヲ加ヘ貿易通商ハ八年一年ヨリ旺盛ナリト雖彼我言語ノ相違セサルニ於テハ交際或ハ親密ヲ欠キ商業時ニ利ヲ失フヲナキヲ保ス可カラズ果シテ我ラハ交際ニ商業ニ其語ヲ學フノ急務ニアラザルハナシ 而シテ朝鮮語ヲ學フモノ其書ニ乏シカラスト雖業務多端寸時ヲ爭フ今日ニ當リ極メテ迅速且容易ニ日常談話ノ大要ヲ學フノ書無キモノ、如シ之レ余カ遺憾トスル所ロニシテ淺學ヲ顧ミス一書編輯スルノ止ヲ得サラシメタル所以ナリ聊カ世人ノ爲メ裨益スル所ロアラハ幸甚

本書は朝鮮語の教材が乏しい中、朝鮮語⁹⁾（ここでは韓語としている）を学ぶ人のための書でもあり、また人との交際や商業(交易)に必要な日常談話が覚えるよう編集したということ进行を明らかにしているのである。

3. 『日韓通話』の構成

本書の体裁は、上下の二段に分け、罫線を入れている。上段は全体の5分の1のスペースを占めており、「増補」と称している。この上段の「増補」欄には、単語やを比較的短めの間答的あるいは単独的な文章を上げて、語句の用法に慣れさせることを目的としている。わかりやすく言えば単・熟語帳のようなものである。5分の4のスペースを占める下段には、覚えておかなければならない基本的な単語及び上段にある単語や短めの文章と対照しながら自由自在に活用できるよう長い文章を掲げている。上下いずれも朝鮮語が主になってその右側に日本語の対訳がついている。

表記は、ハングル本文の右側に漢字交じりの片仮名日本語文を対応させ、所々ハングル本文の左側に直訳の漢字をつけてある。左側の漢字は日本語として見慣れないものが多い。¹⁰⁾

『日韓通話』は、教科書として活用されることを前提にし、本文の単語および連語を学習させ、増補の部の談話訳文の補助にして学生自ら活用できるよう構成している。これは、上段で覚えた単語や連語を下段で応用例を提示することによって学習の効率を高めようとする意図を持って構成されたとみてよいだろう。

なお、上下のいずれも日常語を用いた実用的な単語や文章である。これについて、大石正巳も『日韓通話』の序に「日用必要の語悉く此編に網羅し」と述べるなどその実用性を強調している。

本書の構成について、国分国夫は、緒言で欧米の会話篇の順序を真似して日常の談話に必要な単語連語を収集し構成したことを明らかにしている。

該書ハ歐米ニ於テ行ハルル會話篇ノ順序ニ倣ヒ日常ノ談話ニ切要ナル單語連語ヲ蒐集シ全篇トナセリ而シテ每章ヲ單語及ヒ連語ニ分ツ其主意先ツ單語ヲ學ビ後連語ニ進マシム單語ニ譯ヲ付セサルハ專ラ修學者ノ暗記及ヒ練習ニ便ナラシムルニアリ而シテ連語ハ單語ヲ基トシテ問答的若クハ單獨的ノ談話ヲ組立テ以テ單語ノ応用如何ヲ示セリ

ここで国分国夫がいう「歐米ニ於テ行ハルル會話篇」は、どのようなものであるかは不詳である。^{*11}ところが、『交隣須知』の明治14年本の目次と本書を次のように比較してみると、多くのところが対応していることがすぐわかる。

『日韓通話』

- 第一章 朝鮮諺文並日本仮名
- 第二章 朝鮮諺文組成區別
- 第三章 綴字發音法
- 第四章 基数
- 第五章 天然
- 第六章 月日
- 第七章 時期
- 第八章 身体
- 第九章 人族
- 第十章 国土及都邑
- 第十一章 文芸及遊技
- 第十二章 官位
- 第十三章 職業
- 第十四章 商業
- 第十五章 旅行
- 第十六章 家宅
- 第十七章 家具及日用品
- 第十八章 衣服
- 第十九章 飲食
- 第二十章 草木及果実
- 第二十一章 家禽獸

『交隣須知』

卷之一 天文 時節 方位 地理 江湖 水貌 船楫 人品 官爵 天輪

	頭部	身部	形貌	羽族						
卷之二	蔬菜	農圃	果実	樹木	花品	草卉	宮宅	都邑	味臭	喫貌
	熟設	売買	疾病	行動						
卷之三	墓寺	金宝	鋪陳	布帛	彩色	衣冠	女飾	盛器	織器	鉄器
	雑器	風物	視聽	車輪	鞍具	戯物	政刑	文式	式備	征戦
	飲食									
卷之四	静止	手運	足使	心動	言語	語辞	心使	四端	大多	範圍
	雑語	逍遙								

上の目次の比較でわかることは、部立てにおいて明治 14 年版『交隣須知』の流れを汲んだという事実である。その他にも、韓国語本文に対応する日本語の対訳があること、上下段に分けて上の見出しに本文の単語や連語を提示しているということ、またその会話文の内容がよく類似しているのは確かであり、『交隣須知』の系統を引くものと考えてもよさそうである。¹²

換錢 カハセニシテツカヒマス 『交』売買 (巻 2・48)
日本錢ヲ朝鮮錢トカヘテクダサイ 『日』商業 (p.117)¹³

唾 オシハモノヲ言ヒエヌニヨリキゼキニシマス 『交』疾病 (巻 2・51 ㊦)
オシハモノ云フヲガ出来ズツンボハハナシヲキクヲガ出来ヌカラキゼキデアリマス 『日』人族 (p.70)

櫓 櫓ヲオセ 『交』舟楫 (巻 1・26 ㊦)
泊 舟ヲツケヨ 『交』舟楫 (巻 1・27 ㊦)
櫓ヲオシテ島ニ舟ヲツケヨ上陸シヨウ 『日』天然 (p.20)

掌 手ノハラヒログラレヨ 『交』身部 (巻 1・47 ㊦)
手ノヒラヲ広ゲヨ一握ヤロウ 『日』身体 (p.47)

京都 ミヤコノ人ハ言ガキレイニゴザル 『交』都邑 (巻 2・38 ㊦)
都ノ人ハ詞ガ綺麗デ田舎ノ人ハナマリガ多ウゴザリマス 『日』国土及都邑 (p.73)

精 精神ヲイレテ稽古スレバナルマイカ 『交』語辞 (巻 4・16 ㊦)
精神ヲ入レテ稽古ヲタシカニナサレマセ 『日』文芸及遊技 (p.89)

琴 ——ヒケ小歌ウタハウ 『交』風物（巻3・33才）

琴ヲ弾キ歌ウタウ様子ガ面白ヒデス 『日』文芸及遊技（p.91）

簾 スダレノアイカラノゾイテ見ラレヨ 『交』墓寺（巻3・2ウ）

スダレヲ掛タニヨリ外カラ内ガ見エマセヌ 『日』家具及日用品（p.139）

上の用例は、『交隣須知』の例文を参考にして作られたとみられる例文で、『日韓通話』が『交隣須知』の系統を受け継いでいることを示唆している。ただ、『交隣須知』が文字・発音など基本的なことをマスターしたのを前提にした学習書であるのに対して、『日韓通話』は「朝鮮諺文並日本仮名」「朝鮮諺文組成区別」「綴字発音法」「基数」の文字・発音・数字などの項目も置いていて、初心者でも文字や発音から学習するよう配慮したものであることが両者の異なる点である。

4. 『日韓通話』の日本語について

『日韓通話』について、小倉進平は『朝鮮語学史』で「第五節・内地人の著」のところで次のように紹介している。¹⁴

日韓通話（一卷）國分國夫 明治26年

全篇二十四章より成り、諺文の組織・綴字・発音等より説き起し、基数・天然・月日・時期等の項目に関連し会話を掲げて居る。明治時代に於ける新式會話書の先驅をなすものであらう。

上で見るように、『日韓通話』がいかにも当時の会話書として代表的であるかを強調している。会話文の内容も、緒言の趣旨を実現したもので、会話の実力を育てることに重点をおいている。それでは、はたして『日韓通話』に用いられた日本語はどのようなものであろうか。いくつかの日本語の用法について考察してみる。

4.1. 原因・理由

本書では理由・原因を表すものとして接続助詞や形式名詞・連語である「ニ」「カラ」「ユエ(故)」「ニヨリ」「ニツキ」を用いている。『交隣須知』の江戸写本(京大本)で多数用いられた接続助詞「ホドニ」が本書には用いられてないのが特徴でもある。¹⁵次に、『日韓通話』の接続表現の用例を示す。

目ヲ閉テ眠ツタニ胸ガ^{ヲソツレ}壓 テネムリガサメマシタ (p.52) 드러누엇더니
 コノ近方ノ畑ガ肥ヘタノヲ見ルニ農業ヲ勉メルラシイデス (p.74) 거슬보니

シヤクリガデルカラ水一盃汲ンデコイ (p.54) 피기가나니
 ソノ女ハ世帯ヲネンゴロニスルカラ人毎ニホメマス (p.58) 부즈런이허니

七日ブリニ休ムニヨリ八日ハヒマナ日デス (p.28) 쉬니
 ソノ人ハ元來性質ガ猛惡ナニヨリ必ズ近クオ交ハリナサレマスナ (p.69) 사나우니

十二月ハ期限デスユエ必ズマチガヘマスナ (p.26) 이오니
 時ガ遅ル、故先ニオ往キ私モアトカラジキユキマセウ (p.32) 느저가니

メクラハ何にも見ルヲガ出来ヌニツキアセガリマス (p.71) 보지못히기로

『交隣須知』の江戸写本では、韓国語本文が原因・理由を表わす場合、その日本語の対訳としては「故(ユエ)」「ニヨリ」が「～ㄴ」 という朝鮮語対訳に、「ホドニ」は「～되(dæ)」など特定の朝鮮語対訳として対応しており、いわゆる対訳意識によってなされていることがうかがえる。ところが、『交隣須知』明治14年本には「ニヨリ」は「～(으/으)니(ni)」、「カラ」は「～으로(ŭro)・니(ni)」、「ユエ」は「～미(mæ)・느니(nŭn i)・오니(oni)・고로(goro)」、「ニツキ」は「～기에(gie)・니(ni)」になり、対訳意識が薄れていくように見受けられると同時に、朝鮮語対訳が「～ㄴ(ni)」に統一されていく過渡的な様相も認められるのである。それが『日韓通話』では、さらに対訳意識による朝鮮語の使い分けはほとんどなくなり、原因と理由の場合にはその対訳として「～ㄴ(ni)」の一つになっている。そういう傾向は、日本語でも同様といえる。

<表1>は、『交隣須知』および『日韓通話』における接続助詞の使用数について調べて、結果をまとめたものである。

<表1> 『交隣須知』・『日韓通話』における接続表現の使用数

	カラ	ニヨリ	ニ	ユエ	ニツキ
交隣須知(明治14年)	2	305	44	44	25
日韓通話(明治26年)	131	29	8	3	1

<表1>からわかるように、『交隣須知』で「ニヨリ」が圧倒的に多く用いられたの

が、『日韓通話』では「ニヨリ」はその使用数が少なくなり、「カラ」の使用数が増えている。「ユエ」と「ニツキ」の使用も減り、各々3例と1例しか用いられていない。『日韓通話』では、「カラ」がその勢力を広めていることが一目でわかる。しかし、「ノデ」はまだ出現していない。これは、京極(1986)の小学校国語教科書を中心とした「カラ」「ノデ」の使用に関する調査結果¹⁶と同様、『日韓通話』も社会一般の言語、および変遷を直ちに反映しているとはいいいにくい。

4. 2. 推量表現

様態を表す表現として「ソウ」を接続させて表す言い方があるが、本書では、動詞や形容詞の終止形に接続して様態・推定を表している。それが様態か伝言かというのは、「~듯하오 (ttuthao)」「~의ようである」「~가/나 보다 (ga・naboda)」「~みたいだ」という朝鮮語対訳を参考にした。

顔ノ痘斑ヲ見ルニドウデホウソウヲ重クシタソウナ (p.44) 허엇나보다
 総身ガミナイタムカラドウデ癩ヲフルウサウダ (p.50) 어엇는가보다

『交隣須知』京都本では様態を表す「ソウ(ニ)」¹⁷が32例あるが、その内、連用形に接続した場合は7例に過ぎない。他は2例が名詞に「ソウ(ニ)」、残り21例は動詞や形容詞の終止形に連なっている。

雲 クモガアツマテアメガフリソフニゴザル (『京』巻1・3)
 早 ヒデリデ穀食ガミナカレソウニアッタニ (『京』巻1・5)
 飽 ヨケイニタバタユエハラガヤフレソウニゴザル (『京』巻3・54)

敏捷 同官子イコフサトイソウニゴザル (『京』巻1・34ウ)
 雀 スヽメガサワクヒガクレタソウニゴザル (『京』巻2・3ウ)

内医 ——京都人ソフニゴザル (『京』巻1・41)

『交隣須知』の明治14年刊本にも、26例の様態、推定を表す「ソウ(ニ・デ・ナ)」のうち、動詞の連用形に接続する場合はたった2例しかみあたらない。他は名詞に接続する場合は1例・形容動詞のナ形に接続する場合は2例、21例が動詞・形容詞の終止形に接続している。

雖 タトヒサヤウデモシサウナコトデハナイカ (『交』巻4・15)

羨 —マズシテソノ人ノ動靜ヲ手本ニシサウナコトデアル (『交』巻4・21)

勇 コノ人ハヒドク—氣ナソウニゴザル (『交』巻1・32)

潜着 貪着シテメシトキモ忘レタサウニゴザル (『交』巻4・25ウ)

順 —ニモノ云フ人ハ内ガ広イサウニゴザル (『交』巻4・35ウ)

盈々 —タル水ニヘダテラレテマイリエヌザウニゴザル (『交』巻4・47ウ)

ところが、本書には次のように形容詞「ヨイ」の語幹に「サ」が付いた形に接続している場合が次の3例ある。

ヤケガタ方カケタカラ明日ハ天気ガヨササウデス (p.17) 죠울뜻허오

見カケガワルイカラムセガキヲシテフサゲバヨサ、ウデス (p.134) 쯤캐소

フシガナイカラ板ヲヘゲバヨサソウダ (p.175) 죠울뜻허오

申遣シタモノカ晦ニ間違ヒナクキテ用立ノニドウモオクレサウニゴザマス(ママ)

될듯허외다 (p.28)

上の例文は、すべて状態や性質などに関してそうであろうという推察や判断を表しており、上の3例は、形容詞「ヨサ」に連なっている。この場合にも朝鮮語の対訳が「죠울뜻허오 (johulttuthao)」になっていることから推量と判断した。下の1例も動詞や形容詞の連用形や語幹に接続した場合で、その用法が近代的な用法といえる。

形容詞・形容動詞・動詞の終止形+「ソウダ」は伝聞、連用形+「ソウダ」は推量といった機能分化は朝鮮資料においては、江戸時代からその兆しは観察されるものの、明治期に入ってもその分化が確定せず中期までそのゆれが続いている。¹⁸⁾

4. 3. 二段動詞の一段化

明治10年代の朝鮮語会話書で二段活用動詞を見かけるのはそんなに難しくない。その動詞の二段活用は、明治26年刊の『日韓通話』においても次のように8例も見られる。

時ガ遅ル、故先キニオ往キ私モアトカラジキ往キマセウ (p.32)

急ニ入用ガアルノデスカ何日ニオ遣シ下サル、積リデスカ (p.38)

其中ノ肝要ナモノヲ明年ノ今頃ニ又得ラル、道ガアルト云ヒマス (p.40)
涙ヲ流ル、ニヨリ何ガサホドニ悲シクアリマスカ (p.45)
マゴモアリヒマゴモアルト云ハル、カラサヤウナ珍シイコトハゴザリマセヌ (p.61)
監司ハ一道ヲ治ムル高ヒ官デ禄モユタカデス (p.97)
進物ニ甲斐絹ヲ少シ用ユルカラ店ニ行キテ色々々五疋バカリ求メテ下サイ (p.101)
ワルイ品物ヲ持テ来タトテハネラルルカラ荷主ガ失敗デス (p.112)

ソン(2000)で『交隣須知』における二段動詞の一段化』について調査した結果、5音節以下の場合、音節数が少ない動詞ほど一段化しやすいという結果が得られた。『日韓通話』の場合にも、4音節と5音節の「遅ルル」「得ラルル」「流ルル」「云ハルル」「治ムル」「用ユル」「下サルル」「ハネラルル」が二段活用をしている。

本書における二段活用動詞と一段活用動詞の混在は、動詞の音節数との関連もあるものの、本書に用いられている動詞のウ音便¹⁹⁾、方言色の強い語彙²⁰⁾などからみて、著者の出身との関わりを意識せざるを得ない。つまり、著者の出身地である長崎県対馬の言葉遣いが本書に影響していると見た方が自然ではないかと思われる。

4. 4. 打消過去「マセンデシタ」と「マセナダ」

松村(1998)は、「マシナダ」及び「マセナダ」を江戸語の特徴で、明治の初期から多くの洋学資料に「マセンデシタ」が見られ、明治20年代には「マセンデシタ」が定着するに至ったとしている。明治26年刊行の『日韓通話』にも次のように「マセンデシタ」が用いられている。

一昨日ハドウシタ訳デオ出ナサレマセンデシタカ (p.27)
アスコニオイデナサルオ方ハドナタカ存ジマセンデシタガアナタノ
仲氏ニオ当リナサレマスカ (p.62)

ところが、『日韓通話』には、次のように「マセナダ」という過去否定の表現が混在している。

ノミガ多クテ夜ノアケルマデ眠ルコトガ出来マセナダ (p.52)

この「マセナダ」は、「マセンデシタ」という言い方が一般化する過程に、発生したいろいろな形の言い方の一つであるだろうと推測できるし、そういう面で『日韓通話』

は貴重な文献であるともいえる。

それでは、はたして他の朝鮮資料の打消過去はどうなっているだろうか。まず、『交隣須知』の京大本には「マセナダ」「マシナダ」が用いられているが、²¹ 一方、明治刊本では過去否定の表現が使わず「マセヌ」や「コトノナイ」のような現在の時制に入れ替えられている。

次いで、明治 20 年代の同時期の朝鮮語学習書は、どうなっているのか調べてみた。すると、次のように「マセンデシタ」を専用で用いている場合が多く見受けられる。

今年ハ蚕ガ善ク上ガリマセンデシタ (『日韓英三国対話』・明 25・第二部 p.121)

アリマサガ今日持テ来マセンデシタ (『日韓会話』・明 27・p.193)

久シク御目ニ掛リマセンデシタ (『日韓会話』・明 27・p.198)

見ハマセンデシタ (『日韓会話』・明 27・p.204)

ところが、20 年代の朝鮮語学習書は上の引用例のように、「マセンデシタ」しか用いられなかつたかという点必ずしもそうではなく、明治 27 年刊の『速成独学朝鮮日本会話篇』(吉野佐野助著、大阪)には、次のように「マセナダ」「ナダ」という過去否定が用いられている。

其時ニ笑ヒタフテコラヘラレナダ (p.26)

卵ヲカヘサセタニ不調ビデカヘリマセナダ (p.183)

なお、同時期の英語会話書にも、次のように「ナダ」「マセンナダ」多く見受けられる。『日韓通話』より一年早い『中等応用会話 (Intermediate Lessons in Conversation)』(明 25・桜田晋齋編・東京)には、第三十一章「動詞の過去 否決疑問的」(p.89)に次のような用例を紹介している。

Have I not Worked? 吾ハ働ラカナダカ

Has thou net worked? 爾ハ働ラカナダカ

Has he not received? 彼ハ受取ラナダカ

Has she not received? 彼女ハ受取ラナダカ

Have we not punished? 吾輩ハ罰シナダカ

Have you not finished? 爾(輩)ハ仕舞ハナダカ

Have they not carried? 彼輩ハ運搬シナダカ

また、否定疑問ではない場合にも、次のように「ナンダ」を用いている。

I Have not finished it yet? 吾ハアレヲマダ仕舞ハナンダ

I have not punished them. 吾ハ彼輩ヲ罰シナンダ

「ナンダ」専用の『中等応用会話』の緒言には、「本書ノ趣旨ハ今日語言ノ規則ヲ知り明日之ヲ応用シテ語法ノ記憶ヲシテ確實ナラシメ實際對話ニ臨ミ」とあり、この会話書の日本語が当時実際多く使われていたように思われる。

明治27年刊行の近藤道常『実用商業会話』（「Practical Business Conversation」）にも、すべて「マセナンダ」を用いている。

何故汝ハ昨日其ヲ為サレマセナンダカ (p.3)

私ハ一昨日汝ニ話シマセナンダカ (p.3)

其レハ三日前デアリマセナンダカ (p.4)

私ハ其ヲ持テ来マセナンダ (p.6)

何故汝ハ彼ノ荷物ヲ送リマセナンダカ (p.141)

何故ナレバ彼レハ到着シマセナンダ (p.141)

一方、明治24年刊の若松賤子訳『小公子』には、「マセンカツタ」という独特な表現が使われるなど、この時期の打消過去表現は定着してない様子が見える。²²

このように、東京語成立期ともいべき明治20年代には、「マセンデシタ」がその勢力を広げていく途上であり、25年刊の『日韓通話』には「ナンダ」「マセンデシタ」が混在しているあり方はその事実を示している。

4. 5. 語彙

4. 5. 1. 「アマリ」・「タイソウ」

『日韓通話』での「アマリ」は、度が過ぎていることについて批判的な気持ちを込めて表す場合と、程度のはなはだしいことを表すことがある。

一度ニ余リ沢山学バウトスレバ却テ忘レ易フアリマスカラート節ヅハ
覚ヘラレヨ (p.82)

代価ヲアマリヒドク云フテ利ヲ倍モ取ラムトシテモ出来ヌヨリイクラ
カ引ケ (p.110)

月ガアマリ明ルイカラ星ノ光ガアリマセヌ (p.16)

上の2つの「アマリ」は、朝鮮語の対訳が「ㄴㅅ(nə mu)」、下の程度を表す場合には「하(ha)」と区別されているのも特徴である。

『交隣須知』などの朝鮮資料では程度の高いことを表す「ハナハダシイ」「イコウ」「キツウ」「オオイニ」などが用いられていたが、『日韓通話』では「アマリ」「タイソウ」「ヒドク」といった語彙に統一されている。

山ト坂ヲ越テユキハスルカラタイサウツカレマス (p.22)

今日ハ天気ガタイサウヨロシウゴザリマス (p.35)

聞ケバオ兄様ガムスコヲ設ケラレタト云フカラタイソウヨロコバシウ
ゴザリマス (p. 62)

叔母バ(マ)メヒヲタイサウ愛シマス (p.63)

夫ノ性質ガタイサウ恵ミ深イデス (p.63)

唐木ガ非常ニ沢山来テ代価ガタイソーヤスウゴザル (p.111)

此頃大豆ノ相場ガ大ソーヤスウアリマス (p.111)

曲リ道ヲ廻ツテキテタイサウ遅レマシタ (p.128)

ランカンニヨリカハツテ見ルニゲツシヨクガタイソウヨイデス (p.133)

心ガ正直デマコトニスナホナ (p.53)

格別ナコトデナケレバ売テ往マセウケレドモ値段ガヒドクチガウカラ売レマセヌ
(p.110)

『交隣須知』では程度を表す語彙として「ハナハダシイ」「イコウ」「キツウ」「オオイニ」などの文語調の副詞が用いられてきたのが、『日韓通話』に、「タイソウ」「ヒドク」「マコトニ」となっており、「現代東京語」を意識した口語化の傾向ともいえそうである。²³⁾

4. 5. 2. 「ヒタスラ」

「ヒタスラ」は、現代語では、副詞で用いる場合に、もっぱらそのことに集中するさまやその状態、または、完全にその状態であるさまを表す。ところが、『日韓通話』に次のような用例が見られる。

ダソレバカリ、イチズニ」または「程度が完全な様、スッカリ」の意味以外に「頻繁ニ、タビタビ」の意味の用法もあったことが認められる。明治後半および大正の朝鮮資料における「ヒタスラ」の用法の推移に関する調査を今後の課題にしたい。

5. むすび

以上、明治26年刊の『日韓通話』を近代日本語資料として検討してみた。その結果、上下段の分割や部立て・日本語の対訳などの構成や例文の内容については『交隣須知』に拠るものが多いという事実が明らかになった。

『日韓通話』における日本語は、社会一般の言語、および変遷を直ちに反映しているとはいいいくいが、当時の日本の口語体の成立期の一面をうかがい知ることができる。たとえば、接続の「ニヨリ」「ニツキ」「ユエ」の使用が減り、「カラ」がその勢力を広め口語としての地位を確立しつつある点、伝聞と推量の機能分化の様相、二段動詞の一段化の過程などがそれである。

語彙の面では、副詞を中心として、「現代東京語」を意識した口語化の傾向および朝鮮語対訳を利用することにより、現在日本語では用いられてない語彙の用法を究明してみた。これは、日本語資料として看過できない利用価値を持つもので、今後『日韓通話』に限らず、他の類書についてもその資料の特質が検討され、日本語史の資料としての活用の幅が広げられることが期待される。

*1 朝鮮語研究会(1925)、pp.187～194。

*2 初版から6版まで本文を上下に分けて上の欄を「増補」と称している。2版からは兄の像太郎が22章から24章そして千字文を付け加えたところも「増補」と称している。拙論では、便宜上、上の欄を「増補」欄、後ろに付け加えられたところを「増補」部とする。

*3 目録には「教育」であるが、本文のタイトルは「学校」となっている。

*4 本論文中の用例文の引用に際しては、漢字の旧字体を新字体に改めている。

*5 櫻井(1974) p.114。

*6 国分象太郎は1861年に生まれ、1921年京城で倒れ帰れぬ人となった。

*7 『韓語通話』の発行人でもある。

*8 館野(2005) pp.34～39。

*9 当時国名が韓国(旧韓)であったため、「韓語」という言い方が正しいであるが、ここでは便宜上「朝鮮語」とする。

*10 閑暇(p.28)・擾亂(p.51)・害當(p.65)・生覺(p.65)・對接(p.66)・船艙(p.79)・片紙封(p.84)など

*11 目次が部分的あるいは全体的に類似した英語学習書としては、『改正増補蛮語箋』(嘉永元年)・

『ゑんぎりしことば』(万延元年)・『改正増補英語箋』(万延2年)・『和英通語』(明5)・『KUIWA HEN』(明6)・『英和通信』(明6)・『英仏通弁自在』(明15)・『英仏通弁自在』(明16)・『英語日用弁』(明19)・『独和会話篇』(明19)・『英語通弁』(明21)・『英仏和日本学校用会話新篇』(明22)などあるが、国分国夫が何を見たかを定かではない。

- *12 櫻井文庫所蔵本(明治37)の増補部には、「第二十二章 政治・第二十三章 教育第・第二十四章 船車・日韓訓点千字文」が付け加えられており、時代を意識した項目を新たに新設したものとみられる。
- *13 引用文献は次のように略して示す。(『交隣須知』14年本 → 『交』・『交隣須知』京大本(苗代本) → 『京』・『日韓通話』 → 『日』または、ページだけを示す)
- *14 小倉(1964) p.63.
- *15 『交隣須知』の京大本の「ホドニ」が明治刊本になって「ニ」「ニヨリ」「ニツキ」「ユエ」「カラ」などに改められていることと通じるものがある。
- *16 明治20年代までは、主に「カラ」が用いられており、「ユエ」が少数であるが登場する。「ノデ」は明治30年代になってその用例が見え始める。
- *17 「ソウナ」が1例、「ソウデ」が1例、残りはすべて「ソウニ」である。
- *18 「サウ」の他に様態・推量表現として「ラシイ」「ヨウ」を用いている。
コノ近方ノ畑ガ肥ヘタノヲ見ルニ農業ヲ勉メルラシイデス (p.74)
病デ私ノ容貌ガ瘦タニ今日鏡ヲ見ルニ少シ直タセウダ。(p.150)
- *19 ガラス瓶ガコハレテコナゴナニナツタカラ尖リデ足ヲ切りマセウ拾ウテステラレヨ (p.144)
鎌持テ行テ稲ヲ蒔テセオウテ来ヨ (p.148)
- *20 ハラガフトツテ一盃ダカラオコブリカヒタスラ出マス (p.48)
弟共ハミナ養子ニ往キマシタ (p.62)
- *21 翌日 酒ヲタントノンデ翌日マデサメマシナシタ (京大本・第一巻・昼夜・12ウ)
二日 二日ハカナラズマイロフトサシツレテマイリヘマセナシタ (京大本・第一巻・昼夜・14)
内 ——ソンジハイラシマセナシタカ (京大本・第一巻・方位・16)
明治刊本では、翌日 其ヤウニタベテモ翌日マデ酔タコトハナイカ(明治14年本)
初二日 二日ハイソガシイ日デゴザイル(明治14年本)
内 —— ハソンジハイタシマネヌカ (明治14年本) となっている。
- *22 『小公子』は、13例すべてが「マセンカッタ」を用いている。
- *23 増井(1988) 参照。
- *24 『交隣須知』の14年本では、「ヒタスラ」が11例ある。そのうち、短い期間に何度も繰り返すしょっちゅう、たびたびの意味で用いているのが10例、完全にその状態であることを表す全くの用法は次の一例しかない。真 一実ナ人ハ他ガヒタスラ欺キエヌ (巻4・p.18)

<参考文献>

- 李康民(2003)「1893年刊『日本通話』の日本語」(『日本語文学』第17集)
- 小倉進平(1934)「釜山における日本の語学所」(『語学地理』第63巻第2号)
- (1964)『増訂補注朝鮮語学史』刀江書院
- 梶井 陟(1978)「朝鮮語学習書の変遷」(『三千里』第16号)
- 京極興一(1986)「接続助詞『から』と『ので』の史的考察」(『国語と国文学』第63巻第6号)
- 京都大学文学部国語学国文学研究室編(1966)『交隣須知』京都大学国文学会
- 小島俊夫(1974)『会話篇』(E.Satow)にあらわれた江戸ことば(『後期江戸ことばの敬語体系』笠間書院)
- 櫻井義之(1974)「日本人の朝鮮語学研究」(『韓』Vol.3 No.7)
- 杉本つとむ(1985)『日本英語文化史資料』八坂書房
- ソン・ユンア(2003)『『交隣須知』の明治刊本にみられる日本語』(東京大学大学院修士論文)
- (2006)『『交隣須知』にみられる語法の変化』(『国語と国文学』第83巻第12号)
- 館野 哲(2005)『36人の日本人 韓国・朝鮮へのまなざし』明石書店
- 朝鮮語研究会(1925)『月刊雑誌朝鮮語』第三号
- 辻 星晃(1997)『『捷解新語』にみられる文法意識—対訳朝鮮語の配置を通して』(『日本語と朝鮮語
下』)くろしお出版
- 福島邦道、岡上登喜男編(1990)『明治14年版交隣須知 本文及び総索引』笠間書院
- 増井典夫(1988)「江戸語における形容詞『いかい』とその衰退について」(『国語学研究』第28号)
- 松村 明(1998)『『ませんでした』考』(『増補江戸語東京語の研究』)東京堂出版

<引用資料—発行年度順>

- フランシス・バーネット著、若松しづ子訳『小公子』(明治24)名著複製全集近代文学館
- 松田晋斎『中等応用会話(INTERMEDIATE LESSONS IN CONVERSATION)』国立国会図書館所蔵
- 塩谷敬三『通俗商業会話』(明治26)国立国会図書館所蔵
- 近藤道常『实用商業会話(PRACTICAL BUSINESS CONVERSATION)』(明治27)国立国会図書館所蔵
- 赤峯瀬一『日韓英三国対話』(明治25)朝鮮総督部旧蔵、韓国国立中央図書館蔵本
- 参謀本部『日韓会話』(明治27)国立国会図書館所蔵
- 吉野佐野助『速成独学朝鮮日本会話篇』(明治27)国立国会図書館所蔵
- 参謀本部『日韓会話』(明治27)国立国会図書館所蔵

(ソン ユンア 大学院人文社会系研究科 博士課程)